

変貌するスキー界の最前線で奮闘する者たち

# 裏舞台の采鳴

新しい日本スキー教程 1  
連載第4回

きたるべきシーズンに向けて、現在、新しい日本スキー教程が作成されている。  
スキー技術を修めようとしている者にとっては、まさにバイブルといってもいい  
「教程」が変わることで、日本のスキー界にはなにが起こるのだろうか。  
今回、次回の2回にわたり、日本における教程の歴史とその意味について、世界の動きと  
対比させながら考察し、日本のスキー界に新たな歴史を刻む、新たなスキー教程の本質に迫る。

文・志賀仁郎

スキー教程が変わる。  
それは1級、2級を狙っている、技術指向の若者たちにとっては、ショックなニュースに違いない。

今シーズンの日本のスキー界の最大の話題は、野沢で開かれる第15回インタースキーである。前回、前々回と2回にわけて報告したが、そのインタースキーでもっとも注目を集めるだろうと思えるのが、日本のナショナル・デモンストレーションだ。なぜなら日本は、このインタースキーで新しいスキー教程を発表することになるからである。

8年ぶりの教程改訂で、日本のスキーはど  
う変わるのだろうか。それを予想する前に、  
教程とはそもそも何なのか、そして、その教  
程は日本のスキーにどう関わってきたのかを  
整理しておこう。

## 発行部数世界最大の 教程を生んだ特異な土壌

世界中にたくさんあるスキーの教科書、指  
導書の中で、日本の「日本(SAJ)スキー  
教程」ほど多くの部数が売られているものは  
ない。世界最大の発行部数を誇る指導書なの  
である。

なぜ、そんなに多くの部数が発行され、売  
れているのか。それは、日本のスキー教程は、  
他の国のナショナル・メソッドとは全く異な  
る発想で作られているからであり、その根底  
には、日本のスキー界だけの極めて特異な体  
質があるからだ。

日本は、一般のスキーファンも含めて、ス  
キーのとりえ方からスキーのやり方、スキー  
の教え方、教わり方が、ヨーロッパやアメリ  
カなどとは全く違う。ヨーロッパやアメリ  
カなど、スキーの盛んな国々では、スキーをす  
るという行為は、気の合った仲間、あるいは  
家族で、ゆったりと休暇を楽しむ手段のひと  
つとしてとらえられている。スキーは、大き  
な自然の中でいい空気を吸い、おいしいもの  
を食べ、そして広々としたコースを楽しくす

べりおりる、といった、自然に親しむための  
スポーツとして発達してきた。

一方日本では、スキーはうまく滑ることに  
至上の目的とし、柔道や剣道の道場のよう  
な雰囲気、あるいはテニスコート、バレー  
コートのような空間の、狭いゲレンデで技術  
を磨いていく、といったムードが強い。

欧米と日本のスキーのとりえ方の違いは、  
例えばスキースクールの違いを見ればさ  
らに明らかだろう。

ヨーロッパの人々にとって、スキー教師に  
ついてスキーを習うということは、一般的に、  
そのスキー場のすべてのコースを熟知した案  
内人について滑るということの意味する。  
長いコースを自分の力量に合ったスピードで  
楽しみながら滑る。そうした楽しみ  
を繰り返す中で、自然に技術は向上していく  
というのが、彼らの基本的なスタンスだ。

ところが日本では、小さなゲレンデの一角  
を占領して、「3回曲げて、ハイツ、次」など  
という講習風景が一般的であり、手の位置が  
どう、腰の構えがどう、といった技術の細部  
にわたる指導がスキーを教える側の仕事とな  
っている。また、習う方も、今度こそウエー  
デルンをマスターしたい、などといった意識  
でスクールに参加し、技術へのこだわりを捨  
てることはない。

日本ほど、技術指向が強いスキーヤーが多  
い国はない。

日本の伝統スポーツは、道場と呼ばれる狭  
い空間の中で熟成され、「形に始まり形に終わ  
る」といった様式美へのこだわりを第一義に  
育ってきた歴史をもつ。そうした日本のスポ  
ーツ文化の風土の中で、近代スポーツの中に  
まで、足の運びや手先の動きにまで神経を注  
ぐ、美意識を持ち込んでいるのである。

スキーという、大きな自然の中に楽しみを  
見いだすスポーツが、日本では、まわる、止  
まるという、本来はその楽しみを得るための  
手段としてあるべき技術の一部分だけに注目  
し、より完全なフォームを習得することに血  
道をあげているスキーヤーを日々生み出して  
いる。

## SAJスキー教程の 複雑な性格

技術指向の強い日本人スキーヤーたちにと  
って、その技術の根本となっているのは、い  
うまでもなく、デモンストレーターや技術選  
で活躍する選手たちのすべりである。技術選  
やデモ選への関心の高さが、そのことをよく  
証明している。いいスキーとはどんなフォー  
ムなのか、うまいスキーとは誰のよ  
うに滑ることなのか、といった視線が技術  
選、デモ選に向けられ、それらの行事の写真  
や技術解説書、そしてビデオが販売されると  
いうことになる。

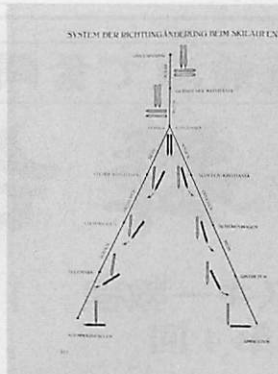
「SAJスキー教程」は、日本のスキーヤー  
たちにとっては、唯一の教科書であり、道を  
究めようと思いついた修道者たちにとっての  
奥義書である。その奥義書の内容は、技術選  
デモ選を勝たがってデモンストレーターと  
いう至高の資格をもつ日本のトップスキーヤ  
ーたちによって具現される。逆に言えば、そ  
れらのトップスキーヤーたちによって演じら  
れた「これが日本人のスキーだ」という、完  
璧なスキー技術を、分解写真で見ることがで  
きる本、それが「SAJスキー教程」だとい  
うわけなのである。

この「SAJスキー教程」の8年ぶりの大  
改訂は、その8年の間に進歩したであろう、  
最新の技法を見せてくれるはずである。技術  
指向の強いスキーヤーにとっては、昼メシの  
一度や二度抜いたとしても手に入れたくなる  
本であることは、疑う余地のないところであ  
る。

どうすればスキーがうまくなるかという、  
技術指向の強いスキーヤーたちにとってのお  
手本である「SAJスキー教程」は、また、  
どうすればスキーを上達させることができる  
のかという、スキー指導者たちのための教科  
書でもある。さらに言えば、準指導員と  
いったスキー指導者を目指す人々にとっての  
教科書であり問題集、虎の巻といった性格も



時代を隔てて、現在までなおオーストリアと日本両国のスキー界に、多大な影響を及ぼし続けている偉大な書、旧「オーストリアスキー教程」。日本版は1957年に出版されている



ハンネス・シュナイダーが考えた技術構成。スキーをV字に使う技術とハザミ状に使う技術とをふたつの流れとしてとらえている

1928年に発行された「スキーの驚異」



フランス スキー術

SKI

1938年発行の「スキー・フランス」は日本では「フランス スキー術」のタイトルで発売された。アレーの見事な技術が美しい写真で示され、アールベルグ・バイブルに変わるセンセーショナルなスキーメソッドとなった



WUNDER  
DES  
SCHNEESCHUHS

併せもった本となっている。こうした幅の広い内容をもたせたスキー図書は、いうまでもなく、ヨーロッパやアメリカではつくられたことがない。

スキーの歴史をつくった  
意義深い教科書たち

スキーというスポーツが、ヨーロッパやアメリカで大衆スポーツとなってから、ほぼ100年。日本に伝わってから約80年が経つ。その間に、世界中の人々にこのスポーツの楽しさを伝え、その技法を解説してきた教科書はいくつかある。

その最初は、1928年にオーストリアのハンネス・シュナイダーが作った「スキーの驚異」である。アールベルグスキー学校の創始者、シュナイダーの技法を分析、紹介したこの本は、世界中の人々を雪山に誘い、第1次スキーブームを引き起こした。世界を熱狂させたこの本は、後に「アールベルグ・バイブル」と呼ばれることになり、当時としては驚異的な部数が記録されている。

1938年、フランスのスパースキーヤー、エミール・アレーが著した「スキー・フランス」邦題「フランス スキー術」は、アールベルグ・バイブルを古典の中に押しやるほどの衝撃を与える書となった。美しい写真を、斬新なレイアウトで見せたアレーの技法は、シュナイダーの主張を大きくくつがえす新鮮なものであった。スキースポーツは、大きく前進しようとしていた。

しかし、アレーのフレンチ・メソッドが発表されたその年、第2次世界大戦が始まり、スキーはもろろん、すべてのスポーツは戦雲の中に消えてしまったのである。

第2次大戦が終わり、雪の上に平和が戻ってくると、シュナイダーを始祖とするオーストリアと、アレーのフランスとの間に、激しい技術論争が起こる。そしてその決着の場として生まれたのが、インタースキーである。このインタースキーの歴史については、前回

前々回に紹介した通りだ。

さて、第2次世界大戦後の世界のスキー界に、もつとも大きな影響を与えた技術書は、1955年にオーストリアが発表した「オーストリアスキー教程」であった。このオーストリア教程は、日本を含む7カ国で翻訳出版され、再び「スキーのバイブル」と呼ばれることになった。

「スキーの驚異」「スキー・フランス」「オーストリアスキー教程」。この3つの書が、スキーの世界を大きく揺り動かしてきた教科書だが、日本では、スキーの興義を伝える書として、全日本スキー連盟がいくつかの著書を発行してきた。

1938年の「一般スキー術要項」がその最初であり、戦争中にも「戦技スキー読本」なる技術書が出版されている。戦後間もない1947年には、早くも「一般スキー術」が刊行。1950年「基礎スキー教科書」、1952年と1955年に「一般スキーテキスト」と、続けて出版されている。

これらが日本人の技術指向をうながし、同時に日本のスキーをひとつの流派に統一していく力になってきたのである。

オーストリアスキーブーム  
の中で生まれた教程

1950年代の後半は、オーストリアスキー旋風が日本に吹き荒れた時期だった。

1957年、スキーバイブル「オーストリアスキー教程」が日本で翻訳出版され、また、その技法の伝承者ともいえる名教師、ルディ・マツト氏の来日。さらにNHK、朝日新聞の2大マスコミの後援による、オーストリアスキー講習会の開催、といった出来事が続いたのである。それによって起きたオーストリアスキーブームの中、1959年、全日本スキー連盟は「SAJスキーテキスト」を発行した。これは、オーストリア流スキー術を全面的に採用した内容のものであった。

この「SAJスキーテキスト」が、現在の

画期的な71年教程から旧教程への後退が明らかに見て取れる74年版の「新オーストリアスキー教程」。この教程で、シュテム・シュブリングが復活している



F・ホッピヒラー教授のスキー理念がまとめられた「シュビンゲン」は、オーストリアのスキー教師養成のための教科書となったが、一般のスキーヤーには浸透しなかった



1968年、アメリカのアспенで開催された第8回インタースキーで、オーストリア

基礎課程は、プルークから導入されるグルンド・シュブリングだけ。これができた仕上げの課程に入って、パラレル・シュブリング、ウエーデルン、ウムシュタイク・シュブリング

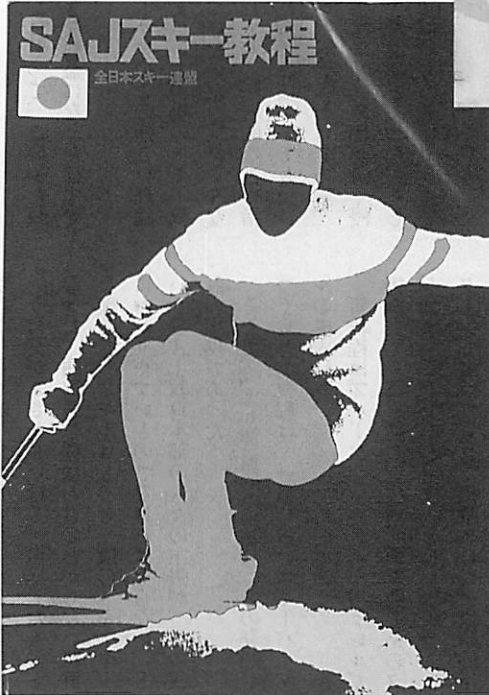
## オーストリア・スキー教程

オーストリア職業スキー教師連盟編 福岡孝行訳



ÖSTERREICHISCHER SCHILEHRPLAN

段階的指導法を廃し、トータル・スキーイングという新しい考え方に基づいて発表された「オーストリアスキー教程」(1971年)はその画期的内容ゆえに、自国のスキー教師たちに受け入れられることなく、74年に再改訂を受けた



1965年10月に発行された全日本スキー連盟「スキー教程」。この教程が日本の現在の教程の性格を決定づけた

1971年版の「SAJスキー教程」は、曲進系技法を取り入れた斬新な内容の教程だったが、日本のスキー界には受け入れられず、わずか2年の命となった

## スキーバイブルからの脱皮をはかった日・奥

デモ選、検定、教程の強固なトライアングルはこうして生まれ、日本のスキー技法の中央集権化は、このトライアングルの成立によって進行したのだった。

伸ばしてまわすとするヴェーレン・テクニクを中心にしたこの教程は、従来のオーストリアの主張からは予想もできなかった新鮮な内容のものであった。それは、アспенのインタースキーで発表された段階指導法の廃棄と、トータル・スキーイングの新しい考え方が採用され、極めて簡潔な構成となっていたのである。

「SAJスキー教程」は、そうしたムーヴの中で神格化されていったのである。そして、デモンストレーター選考会は、SAJスキー教程の全き具現者を求める競技会となっていた。

日本で曲進系教程が発表された次の年、世界中のスキー指導者が待ち望んでいたオーストリアの新教程が発表された。曲げてまわし、その技法を組み込んだ教程が、1971年に発刊されたのである。

この時期、現在の技術選のルーツとなる「デモンストレーター選考会」が発案され、これを頂点とする、全国のスキー教師たち、スキー教師を目指す若者たちの研鑽が始まった。それにより、従来から行なわれていた技術検定が、よりいっそう重い意味をもつようになった。「SAJスキー教程」は、そうしたムーヴの中で神格化されていったのである。そして、デモンストレーター選考会は、SAJスキー教程の全き具現者を求める競技会となっていた。

この世界の流れの中、日本でも、旧オーストリア流から脱した新たな技法、指導理論の構築が試みられている。

50年代後半から続いていたオーストリアスキーブームは、コルチナ・オリンピックの三冠王、トニー・ザイラーの来日(57年)によってさらに大きくなり、スキーバイブルの著者、ステファン・クルツケンハウザー教授一行の講習会(63年)で燃え広がった。そして、65年、バドガスタインでのインタースキー参加によって決定的なものとなったのだった。

曲進系技法と呼ばれた沈み込み技法が登場し、その技法を組み込んだ教程が、1971年に発刊されたのである。

1960年代は、日本のスキー界が大きく揺れ動いた10年であった。

このアспенにおける衝撃的な理論転換と、続く1970年、オーストリアのサンクリストフにおけるヴェーレン・テクニク(波の技法)の発表によって、世界中のスキー指導者は、1955年から続いた「スキーバイブルの呪縛」から解放された。そして、スキー技法、スキー指導理論は新しい方向を求めて流れだした。百家争鳴の時代が訪れたのである。

その内容はオーストリアスキーを唯一のスキー技法とする風潮を反映して、まさに日本人によるオーストリアスキーの奥義書といってもいいものであった。

長い間世界中のスキーヤーたちを縛りつけてきた「スキーバイブル」の廃棄であった。プルーク、プルーク・ボーゲン、シュテム・ボーゲン、シュテムターン、パラレル、ウエーデルンと整然と組み立てられた段階的な指導法を廃して、グルンド・シュブリング(基礎的なターン)と名づけられた、両足を開いたフォームによるパラレルターンの習得さえできれば、それから後は、すべりこむことによってさらに洗練されたターンに到達できるとする、トータル・スキーイングの考え方の採用であった。

という3種類のターンが横並びに配されている。

グルンド・シユブングさえ身につけていれば、どんな斜面、どんなコースでもすべてのことができ、そこから先へは、グルンド・シユブングを洗練させることによって、3つの技法が習得できるとしているのである。パラレル、ウエーデルン、そしてウムシユタイクには、難易度による差はなく、状況に応じて使い分けられる技法であるというわけだ。

この構成は、アスペンでの発表、さらにウエーレン・テクニクの発表以後、初めてオーストリアの真意がすべて明らかにされたものと言っている。世界のスキー指導者には、この簡潔なメソッドは十分な説得力をもっていた。

前年に発表されていた日本の新しい教程も、期せずして、このオーストリアと同じ視点に立っていた。

一般のスキーファンにとって、このふたつの教程の発表は、大きな利益になったはずであつた。

ところが、オーストリアのこの新しい理論は、スキー学校で教えている現場のスキー教師たちの反発をかっていたので、突然こんな考え方を押しつけられても、伝統的な古い指導法しか知らないわれわれには、とても受け入れることはできない、というわけである。

あまりにも、旧オーストリア教程が深く浸透していたために起きた混乱であつた。そして、日本の曲進系教程も、同じ運命にあつたのである。

## あまりにも強かった スキーバイブルの影響

オーストリアの画期的な新教程、そして日本の、オーストリアの理論よりもさらに前進したといえる新しい考え方（スキー教程・71年）は、広い理解が得られないまま、数年後には再び改訂されることになったのだ。

1974年、オーストリアは再改訂といえ

る新しい指導プランを発表した。それは一般には、71年教程で反発をかった部分を修正したもので、とらえられている。ウエーレン・テクニクの主張をあまりにも極端に打ち出したオーバーな沈み込みフォームを、より自然なものにした、という見方だ。だが、この教程をよく見ると、スキーバイブルと呼ばれた旧教程の段階的指導法への回帰という現象が読み取れるのである。

シユテム・シユブングが再び採用され、指導課程の中間の位置を占めているこの教程では、トータル・スキーイングの理論はやや後退を見せたといわざるを得ない。旧教程があまりにも浸透して、現場のスキー教師たちには新教程の理論とその精神が理解されなかった、という背景がそこにあつたのは明らかであつた。

日本の曲進系教程も、わずか2年間で改訂された。それは、改訂というよりも、廃棄という言葉がふさわしいほど、徹底したものとなった。曲進系教程はわけのわからない難解な理論で、スキーはもつと一般のスキーヤーにわかりやすいものでなければならぬ、というSAJ教育本部の人々の主張が、その改訂の根拠であつた。

そして、「より普遍的な教程」との発想でつくられた教程は、一気に古いスキーバイブルの構成に舞い戻っていたのである。

新教程はブルーク、シユテム、パラレルで組み立てられ、新しい技術である曲進系のターンは、その上の応用技法としてピボット・ターンと名づけられて掲載された。段階的指導への逆流がそこにあつた。

激しく揺れ動いた70年代であつた。斬新な理論、そして前衛的な技法は、スキーの世界を変えることはできなかったのである。

1968年、アスペンのインタースキーでオーストリアが自ら廃棄を宣言した旧教程の影響は、あまりにも強大であつた。画期的な新理論を発表した当のオーストリアにおいてすら、新たな理論が受け入れられなくなってしまうほど、スキーバイブルとまで呼ばれた旧教程は浸透していたのである。

そして、長い間オーストリアスキーこそスキーだとしてきた、オーストリアスキーへの信仰根強い日本でも、旧オーストリアスキー教程への憧れは、一朝一夕に消し去るにはあまりにも大きなものだったのである。

話は前後するが、この日本の旧教程への憧れの大きさは、SAJ幹部のアスペン・インタースキーの報告にも明らかだ。すなわち、オーストリアの歴史的「旧教程廃棄」の宣言を受けてすら「オーストリア・スキーは一言半句も変更することはなかった」とし、旧バイブルは揺るぎないものと報告しているのだ。

さらに、内容的にはまったく新しいものとなつていた71年のオーストリア新教程が発表されてもなお、その新教程は旧教程の上に追加された新たなバリエーションと受け止める、というかたくなな姿勢をとっていたのだ。

1979年、蔵王で開かれた第11回インタースキーでは、オーストリアはナショナル・デモンストレーションにおいて指導法を展開することをやめ、ターンの技法の分析を公開した。そしてその理論は、F・ホッピヒラー教授の研究として、1980年秋「シユビゲン」というタイトルで論文の形で発表されている。

「シユビゲン」はオーストリアのスキー教師養成コースの教科書となった。「スキー教師は、より深くターンのメカニズムを理解しなければならぬ」というホッピヒラー教授の考え方が、このシユビゲンだったのである。しかし、オーストリアでは、このスキー教師養成のための教科書は、あくまでも教師養成のためのものであり、一般のスキーファンが読むものとはなっていない。

それを証明するかのように、オーストリアを中心としたドイツ語圏では、シユビゲンを発表以後に発売された、ルッキン・シヤラーというオーストリア人スキー教師が書いたテキストが、一般のスキーファンに支持され、シユビゲンをうまわる売れ行きを見せていた。そして、このルッキンのスキーテキストの構成は、まさに55年の旧教程、スキーバイブルそのものだったのである。

## 脱・スキーバイブルを 模索して、今……

スキーバイブル、旧オーストリアスキーを絶対視する中で、スキースポーツは大きく変貌しようとしている。1960年代後半から始まった技術革新、そして、スキー場の環境の変化。さらに用具の革命的な進歩がその流れを加速させている。

スキーをする人々の圧倒的な増加、それらの人々を受け入れるスキー場の施設や環境の整備、より扱いやすいスキー用具の開発といった大きな変化は、スキーをだれにも楽しめるやさしいスポーツへと変えていったのである。

旧バイブルの時代、そのバイブルに紹介されたウエーデルンという技法は、超上級者にしかできない最高難度のスキーだった。それが今では、スキーを始めて数日の人でも、なんとか形になるすべりができてしまう時代なのである。

どう教えたらスキーを上達させることができるか。どう習ったらスキーがうまくなるのか。そのテーマに沿って、どんな指導法、どんな練習法が効果的なのを探る作業が、今強く求められているはずなのである。

今回発表されるSAJの新教程は、1991年のサンアントンにおけるインタースキーで発表された世界のスキー技術、指導理論の流れを読み、さらに日本における理論研究の成果を盛り込んだ形で構成されている。

新しいこの教程は、従来の古いオーストリアスキー教程に縛られた構成から脱した、画期的なものになっている。今回は、その新教程の提起する、新しいスキーについて考えてみたい。